

海を向いて生きよう

清水のヨットマン 田中 満

高校時代、社会人山岳会に所属していたボクは、大学入試合格と同時に山岳部に入部しましたが、ちょっと大学山岳部とは反りが合わず、入学式後百八十度方向転換してヨット部に入ってしまった。

入学式後のクラブ紹介の時、ヨット部のコーナーがあつてロープの結び方を教えていたのですが、ロッククライミングをしていたボクはロープワークは熟知していて、いとも簡単にクラブへの勧誘を受けてしまったのです（笑）。そして三浦半島、油壺の海でしごかれました（泣）。しかし、「自然に対しての気持ちの持ち方」は海も山も同じで、当時でもそれほどの違いは感じませんでした。

卒業後、静岡に戻つて来てもヨットを続けて行きたいと思ひ、一人乗りの小型ヨット（デインギー）を三保の浜に置いたのが昭和四十六年のことでした。それ以来、海とヨットにはまり込んでしまい、休日のほとんどを海の上で過ごすことになりました。冬でも夏でもヨットに乗るために清水港に出かけて行くのです。

昭和四十年代半ば、ドリームプラザ横、現在イベント広場があるところに大洋冷蔵という会社が在りました。その前の海面をヨットの係留場所として借り、清水港ヨット協会大型艇部会という組織をみんなで作つて、諸先輩が行政と交渉して海面を借りました。当時は「清水船溜まり」という場所でした。今ではドリームプラザ前に係留してあるヨットは、百隻を越えるようになっていますが、最初は一五、一六隻ではなかったかと思ひます。

海岸国日本

地球の赤道の長さ約四万キロメートルに匹敵する三四、六二二キロメートル言われている日本の海岸線（一九九七年建設省河川局海岸室）。そして約五一〇キロメートルあるという静岡県の海岸線。その中にある駿河湾、その一部の清水港をそうして海の上から観てきました。

日本は四方を海に囲まれています。歴史的に見ても意識的に見ても海洋国とは思えません。島国であつても海洋

国とは思えない処も多々あります。それでは海洋国じゃあなくて、海岸国という言葉があつたら、海岸国かもしれないな…なんて思つたりしています。そしてある一部の人たちを除いて、なんとなく海に背を向けて生活しているような気もするのです。

清水港を見回す場合に「陸側から見た港」「港の陸側」だけでは片面しか見ていないことになると思ふのです。そうではなくて港は海への出口、海への入口、街への入口…「海との接点」だと思ふのです。

「人の集まる街作り」と称して海岸を埋め、ブルドーザーで山を削り、道路を延ばして、その先に箱モノを作るといふ観光政策は終わりました。

「ヨットになんかに乗つて…」と言つと、贅沢な…とか、豪華な…とか言う雰囲気がありますが、実際はゴルフとかスキーと同じです。ヨット、レジャーボートなどは贅沢だ…という意識を外さないと、「海から港を見る」「海から陸を見る」ことを考えることができません。清水港は海への入口なのです。

海に背を向けた町で

ボクたちがヨットに乗つて海から戻つて来ます。沖の防波堤を過ぎて三保真崎を回り込み清水港に入ってきたときに、最初に感じるモノは、風景や街の雰囲気「まじまり」が無いことです。たぶん客船が入つてきても、乗客はそんなふうには感じるのはないかと思ひます。右手にコンテナ埠頭、クレーンそして東亜燃料のタンク。正面は商業ビル、



そしてその後ろに日本平。左手には不気味な茶色のボーキサイトの山。そして折戸湾という小さな入り江。風景にポイントが無く、どこを眺めてよいのかわからないのです。産業優先という景色なのでしょう。海から清水港へ入ってきた人々を迎えてくれる雰囲気はまったくないのです。どこか知らないJRの駅に降りたのでしょうか。駅を降りて改札を抜けると何かしらを迎えてくれます。駅前広場があったり、大きな商業施設が正面玄関を開けて待っていてくれたりします。どんな田舎の小さな駅でも、駅前に飯屋があったり、タクシーがあったり「あっ、ここは駅なんだ！」という雰囲気があるものです。それが清水港へ海からアプローチすると、その「何かを迎えてくれる感じ」が無いのです。商業港だから当たり前だ：という考えがあったのかも知れません。

海からの視点を取り戻すために

僕たちのヨットは海から戻る時には、正面のマリンビル方向へ向かい、右折してドリームプラザ前の係留場に入りますが、海岸線にあるほとんどの構造物が山側を向いているのです。正面から見ると素敵なビルも、みんな海に背を向いている感じがします。徹底的に海側を無視してデザインなのか、清水港全体が海に背を向いている感じがするのです。海に背を向けている住人の気持ちも、ハッキリ形になって現れているようで、ちょっと不気味な感じもします。

江ノ島電鉄に何度か乗ったことがあります。七夕豪雨で

廃止になった清水の電車の例でもよいかもしれませんが、西久保から袖師にかけて線路が民家の裏庭を縫って走っている場所がありました。車窓に見るべきモノのない、見てはいけない風景ばかり続きます。あんな感じがしてしまふのです。清水の街は海の方を向いて欲しいのです。昭和四〇年代初め、ボクはギリシヤの客船に乗って太平洋を渡り、サンフランシスコ港へ朝霧をついて入港しました。ゴールデンゲートブリッジの下をくぐり港に入ってしまったのです。その時、サンフランシスコの港と街はしっかりと我々を迎えてくれた記憶があります。

もっと海に向かって暮らす街に

また、清水港周辺は多分、日本の港の中でまれにみる優れた海洋レジャーゾーンだと思います。

- ・清水港海釣り公園、三保半島での魚釣り
- ・三保半島先端の海水浴場
- ・興津川河口の優れたサーフィンポイント
- ・清水マリンパークにおけるクルーザー係留設備
- ・三保半島先端内側の小型ヨット（デインギー）エリア
- ・それに伴う、ウインドサーフィンポイント
- ・折戸マリーナ
- ・それに伴う折戸湾内のセーリングポイント

- ・三保真崎海水浴場南側のダイビングポイント
- ・その南側のジェットスキーポイント

これらが半径2キロメートル以内に収まっているのです。こんなエリアは他の地域では見かけられないはず。特筆すべきは折戸湾内にほとんど波が立たないことです。そのためデインギー、ウインドサーフィン等が海へ出るのに適しているのです。

また駿河湾フェリーにとっても清水は駿河湾という通路を通って西伊豆への入口、または西伊豆からの出口なのだと思っています。

2008年7月にはエスパルスドリームプラザに高さ52メートルの観覧車が完成しました。夜間はLEDのイルミネーションで飾られています。それが海に向き合っ暮らす街の新しいランドマークになることを心から願います。



●田中 満さんのホームページ
<http://www.the-support.net/something/>